

隅田川散歩 (二) 防潮堤とスーパー堤防

長尾 進一郎

荒川と離れた隅田川は、左岸が足立区、右岸が北区に接して流れる。最初にくぐる橋は環状七号線の新神谷橋。この付近はコンクリートの防潮堤が壁のように続き、その外側の歩道を歩いていると川面は見えないので、川の姿を求めて足が速まる。歩道の外側には家や工場が迫り、土地の高さは概して川面より低そうなので、防潮堤はまさに命綱である。防潮堤の銘板から、昭和三〇〜四〇年代に整備されたことが伺える。「昭和の隅田川」の面影が残る区間で、元々自然の川であるが、緑が少なく人工の運河のように見える。一方東を流れる荒川は、九〇年の間に自然に溶け込み、人工河川とは思えない。

新田橋、新豊橋と進むと、コンクリートの防潮堤に代って、川岸に土を高く盛り、草に覆われた堤防が姿を現した。堤の高さは数メートルあるうか。頂部に遊歩道が続き、側面は緩い傾斜で川に向かって下り、水際にもテラスと呼ばれる遊歩道が作られている。堤の上と下から川を眺められる構造で、家族連れが散歩をしている。昔の防潮堤の一部がモニメントとして保存され、説明書きがある。『昭和五十年頃までに作られた垂直の防潮堤は洪水から街を守る上で貢献したが、人々から川を遠ざけてしまった。そこで都民が川と親しめて安全性も高いスーパー堤防に順次作り替えている』。高度経済成長期に必要な迫られて整備した防潮堤は立派に役目を果たしたが、現代は機能の他に環境や潤いにも配慮する時勢となり、時の流れと社会の成熟を感じる。

経済成長期は隅田川の水質汚染が最悪となった時期でもあり、「死の川」とさえ言われた。下水道の整備や川底の浚渫など、永年の努力で現状まで改善させたのは偉業と言えよう。

豊島橋の前後で川は逆S字に大きく蛇行する。右岸が北区から荒川区に変ると、大きな観覧車が現れた。あらかわ遊園は東京二三区内で唯一の区営の遊園地だ。荒川区に現在「荒川」は流れていないが、荒川区が出来た昭和七年には隅田川は荒川を名乗っていた。(つづく)